

第128回

スターものまねのスター、  
三田明の功績と航跡

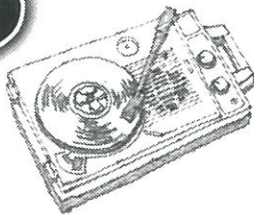
『象印 スターものまね大合戦』がスタートした昭和42年は、初期GSブームと重なり、番組にはデビュー間もない頃のテンプターズも出演、兄貴分だったスパイダースの『夕陽が泣いている』をショーケンが歌っていました。結果？ マチャアキの歌唱の特徴をよく捉えてはいたものの、彼らの認知度の低さからか、「熱演賞」止まりだったと記憶します。

その後『スターものまね大合戦』は三田明の登場によりブレイク、御三家（橋、舟木、西郷）の次席に甘んじていた三田が「スターのものまね」というジャンルに革命を起こします。御三家同様、三田自身の人気にもかげりが出ていた時期でしたが、20代半ばに復活、ぼんちおさむに影響を与えたであろう橋幸夫のものまねもすばらしかったし、美男が売り物だった自らの顔を極端に崩して歌う森進一の『年上の女』は絶品でした。三田の代表曲といえば、歌謡史に残るヒット曲でもある、デビュー曲『美しい十代』になるのですが、

実はナンバーワン・ヒットも多く、映画化された主演作が数多く公開されています。青春歌謡に限らずさま

名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎  
絵・松本浦



ざまなジャンルの曲にチャレンジ、橋幸夫の『南海の美少年』『花の白虎隊』に続けとばかりの歴史時代劇ヒーローものの『安寿と厨子王』『牛若丸』をはじめ、吉永小百合や柏木由紀子とのデュエット曲などは老若男女を問わず楽しませてくれました。また、橋とともに開拓した『アイビ―東京』『恋のアメリカッチ』などのリズム歌謡はGSへの橋渡し役となり、中学3年だった私が「アイビ―」という言葉を知ったのも三田明のおかげです。

NHKの人気番組『チコちゃんに叱られる!』を見るたび、『ごめんねチコちゃん』（昭和39年）の歌が甦ってしまうのもファンゆえの習性で、歌の最後に入る「なにさ、あんた」

「はくい、アキちゃん」などの黄色い声の合いの手が懐かしいですね。三田の数あるヒット曲の中でも、特に私のお気に入りだったのは、デビュー翌年の昭和39年4月に発売されたシングル第4弾『若い港』（詞・宮川哲夫）と、翌40年11月発売の『若い翼』（詞・山上路夫）という、大型船の練習生とパイロット訓練生を主人公にした「海と空」の連作ソング（曲・吉田正）です。

吉田作曲の『いつでも夢を』同様の弾むようなメロディーは、両曲とも思わず口笛を吹きたくなるような佳曲です。曲の冒頭、三田が羽田の管制塔に向けて「J A - 3 2 1 8 レディ・フォー・テイクオフ」と離陸準備完了を英語で伝える長台詞が話題となった『若い翼』ですが、順調にヒット街道を上昇、三田はこの歌で2回目の紅白歌合戦出場を果たします。「スチュワードレス」という言葉が光り輝き、女性の花形職業だった時代です。

同曲の人气が定着した翌41年2月、全日空機が羽田沖に墜落し乗客乗員133人が全員亡くなるという大惨事が発生、残念ながら、それ以後「エンジン吹かして出発だ」の歌声も、雲の彼方へと消えて行きました。